

パートナーシップ宣誓制度の手続きを行った 教職員が結婚や配偶者要件のある 休暇を取得できるように休暇制度が一部改正され 2025年10月1日から適用されました。



山口大学では、2019年4月に「山口大学における多様な性的指向と性自認（SOGI）を尊重する基本理念と対応ガイドライン」を策定し、学生や教職員のSOGIに関する悩みに配慮し、積極的に支援する仕組みをすでに構築しています。また、2023年1月に策定された「明日の山口大学ビジョン2030」においても、多様な知が共奏するダイバーシティキャンパスを創造することも謳っています。

今回の制度改正は、山口大学の「SOGIガイドライン」の理念に沿った改正であり、ダイバーシティ推進室は、これからも多様なSOGIを積極的に支援していきます。



▲SOGIガイドライン冊子



▲SOGIポスター



◀休暇制度の
詳細はこちらから
※「勤務時間、休暇等の
取り扱いについて」参照
(学内限定ページ)



◀SOGIガイド
ラインの最新版
はこちらから

山口大学ダイバーシティ推進室 ニュースレター vol.06

編集・発行

山口大学ダイバーシティ推進室

TEL 083-933-5997 / FAX 083-933-5992

E-mail ydpo@yamaguchi-u.ac.jp

〒753-8511

山口県山口市吉田 1677-1 (事務局 1 号館 3F)

URL <https://ds0n.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~diversity/>



対
談

富士 彩紗

山口大学 大学院創成科学研究科
(理学系学域) 助教

×

鍋山 祥子

山口大学 副学長(ダイバーシティ推進担当)
ダイバーシティ推進室室長
経済学部教授

研究への興味

鍋山先生：この度は、日本学術振興会「育志賞」の受賞、おめでとうございます。今回の受賞をどう受け止めていらっしゃるでしょうか？

富士先生：「育志賞」は若手研究者の育成のために大学院博士課程の学生に贈られる賞で、「今後の学術研究の発展に貢献できる研究を期待してますよ」という賞なので、これからの研究の励みになると思います。

鍋山先生：現在は、助教として山口大学の大学院創成科学研究科（理学系学域）で研究を続けていらっしゃるということですが、学部は理学部ですよね。いつぐらいから理系分野に興味があったのですか？

富士先生：小学校の時から生き物が好きで、だんだん生き物が何で生きているのかを考えたり、自分の体の中で起こっていることを知らないのが不思議だなと思ったりすることがあって。そういった分からないことが悔しいという思いがあったので、その謎を解き明かしてみたくて、理系の道に進みたいと思いました。

鍋山先生：悔しいと感じたのはすごいですね。そして、山口大学の理学部に進学された。

富士先生：大学進学の際から、私の目標は研究者になることだったので、早く研究したいという思いがありました。

鍋山先生：大学に進学すると、勉強していく中で、すでに解明されていることを知ることもありますよね。それでも研究したいと思ったんですか？

富士先生：そうですね。実際に大学の講義の中で学ぶこともありましたが、それでもわかっていないことがまだたくさんあると思ったので、さらに研究したいと思いました。

鍋山先生：いよいよ大学院に進学するとき、ご両親の反応はどうでしたか？

富士先生：研究者を目指していることは伝えていたので、理解はあったと思います。ゼミの先生から様々な支援制度についても教えていただいて、その支援制度が後押しになって進学を認めてもらいました。

鍋山先生：先生からの期待を感じたり、周りの人との扱いの違いを感じたりすることはありましたか？

富士先生：期待というよりは「協力」という感じでした。いろいろな情報提供や、博士課程に進むなら見聞を広めた方が良いと

いうことで、武宮淳史先生（大学院創成科学研究科(理学系学域)生物学分野）が参画されている学術変革領域研究（文部科学省科学研究費助成事業）に少し参加する機会をいただいたりしたのが、良かったなと思います。周りの人との扱いの違いはあまりなかったですが、植物の研究は1年ぐらいかかるので学部の間だけでは難しいんです。なので、大学院に進学する人に対してはある程度のサポートは必要になってくるのかなと思います。

鍋山先生：周りの人にも恵まれて、今に繋がっているんですね。順風満帆ですね。今でもやりたいことができていますか？

富士先生：はい。

鍋山先生：それは素晴らしい、良かったです。

研究者としての歩み

鍋山先生：少し話が変わりますが、「女性研究者」というカテゴリーで媒体の取材や広報活動への協力依頼などがあると思います。ダイバーシティや男女共同参画を推進している立場としては、研究者の裾野拡大や理系分野に進む女子学生さんを増や

特集：対談

富士先生 × 鍋山先生

p.1-2

調査結果

案内

学生団体 (Ianka) によるパラスポーツ認知度調査報告

パートナーシップ宣誓制度に伴う休暇制度の一部改正について

p.3

p.4

したいという意図で女性研究者の方にロールモデルとしての露出をお願いすることもあるのですが、「自分は研究者であって、女性研究者としては扱われたくない」という反応も少なくありません。難しいところですか？

富士先生：私が研究者になる上で、女性だからといってあまり不安に思うことはなかったです。それはロールモデルがいたりだとか、周りの先生方の経験を聞いたりしていたからかなと思います。若い世代の人たちにこういう道もあると示すことで、不安なく進んでもらえるように手助けができればいいなと思っています。なので、現時点では取材などがあれば、お受けしたいと思っています。

鍋山先生：「私にできることがあればいいですよ。どうぞ見てください」というスタンスですよ。では、研究の道を歩んでいる



過ひせています。ただ、ちょうど今年の3月にあった学会で男女共同参画というテーマに触れる機会がありました。そこで、やっぱり女性だからこそ出産とか育児とか特有のライフイベントがあって、実際にそれで諦めないといけな部分もあるんだろうなと思いました。そこがちょっと難しいところですね。

鍋山先生：山口大学のダイバーシティの推進というのは、様々なライフイベントに対する支援は勿論ですが、男性か女性かという身体的な性差で支援に差をつけるのではなくて、誰もが研究や仕事を当たり前に行けるように、障壁となっている部分をできるだけとりのぞく支援をしていくというスタンスでやっています。難しい部分は、それこそ人それぞれです。だから、その人が感じる「難しさ」をぜひ、伝えて欲しいと思っているんです。

富士先生：ライフイベントで必要になる支援については、正直なところあんまりわからないんですけど、自分の研究と生活の両立ができるような支援があればいいなと思います。

鍋山先生：そうですね。すでに育児休業からの復帰支援や仕事と介護の両立で悩まないための介護支援などがありますが、その基本はワーク・ライフ・バランスです。育児や介護というケアだけではなくて、プラ

先輩として、研究に興味を持っている高校生や学部生などの若い人たちに、研究者を目指すことって、お勧めできますか？

富士先生：そうですね、やっぱり博士課程までいくとなると、いろいろ不安もあると思います。でも、様々な支援が充実していることで進みやすくなったところもあるので、そういった支援を活用すれば大丈夫だよということをお伝えしたいですね。

鍋山先生：実際に大学院に進学後、企業に就職する人もいれば、研究者を目指す人もいますが、分かれ道って何だと思いますか？

富士先生：分かれ道は、自分の探究心があるかどうかだと思います。企業では研究のようなことをやっても、原因追究というよりは結果を出すためという感じだと聞いたことがあります。でも研究者は「どうして、もっと、なぜ」と追究していくじゃないですか。

鍋山先生：アカデミアの特徴でもある研究者自身が出発点になって、やりたいことを突き詰めることができることが研究者の魅力ということですね。大学の先生になるとそこに教育が入ってきますけど、どうですか？

富士先生：正直なところ、もともと研究だけしていたいタイプで、教育は苦手意識を持っていました。ただ、まだ1コマ担当する

イバートと仕事との両立という意味でも、ワーク・ライフ・バランスの推進にしっかりと取り組んでいきたいと思っています。

めざす研究者像

鍋山先生：先程ロールモデルという言葉が出てきましたが、研究者になるにあたって、ロールモデルというか、お手本というか、そんな先生がいいらっしゃるんですか？

富士先生：名古屋大学の野元美佳さんです。年齢もそこまで遠くなくて、同じ地方大学出身なんですけど、すごい業績を挙げていらっしゃるってロールモデルにしています。

鍋山先生：野元先生を知ったきっかけはなんですか？もともと研究領域が近いのでしょうか？

富士先生：そうですね。植物の研究をされている方で、指導教員の先生と知り合いだったので、こういう人もいるよと紹介してもらいました。

鍋山先生：どういったところが目指すべき研究者像というか、魅力というか、野元先生のどこに惹かれますか？

富士先生：研究力がすごくて、明るくて優しい方なので、こういう研究者になりたいと思いました。

鍋山先生：やっぱり、バリバリ研究をして

程度ですけど、実際にやってみて、自分が考えている植物の面白いところが伝わったかなと思うと、ちょっと楽しいですね。学生さんにこの思いが伝わって、研究する仲間になってくれたらうれしいです。だから、不器用ながらも伝えられたらと思っています。

鍋山先生：そうですね。私が教育で一番大事だと思っているのは、興味を持ってもらうことです。今の時代、情報は沢山あって、調べようと思えばいくらでも調べられる。だから、これって面白いのかもとか、何でこうなっているのかなっていう興味を育みさえすれば、後は自分で調べて、進んでいくことができる。先生が面白がっていることが伝われば、学生さんも「面白そうかも」って思ってくれるから、それが一番だと思います。

大学の労働環境に求めるもの

鍋山先生：ダイバーシティ推進室は性別、障害、SOGIなどの多様性が、働くことや学びにとってマイナスにならないような環境をつくっていくという役割を持っています。今後、大学で研究者として働くにあたっての不安や要望はないですか？

富士先生：正直なところ、現時点ではあまり女性男性とか関係なく、一人の研究者として

いる姿はかっこいいですよ。野元先生が女性だということも自分の将来像と重ねやすい理由になっているのでしょうか。

富士先生：男性でも特定の人がいるわけではないですが、参考にさせてもらうこともあります。ただ、やっぱり性格や物事の捉え方とかが違う部分があるかもしれないので、女性の方がより親近感があると思います。

鍋山先生：なるほど。自分と共通点がある方が、より深く影響を受けるのかもしれないですね。

鍋山先生：最後に、今後の展望を聞かせてください。

富士先生：そうですね、今やりたい分野があるので、それを突き詰めていきたいと思っています。

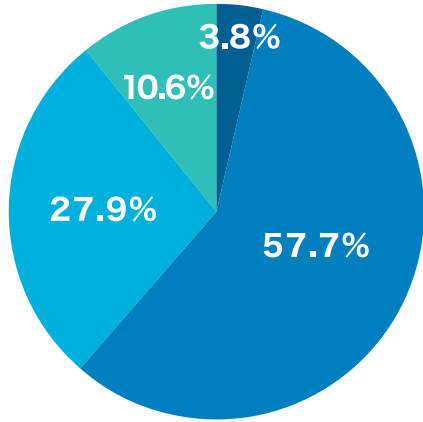
鍋山先生：多くの女性研究者の方がおっしゃるのが、「知りたいことをただずっと追いかけているうちに研究者になっていた」ということです。ずっと持ち続けている探究心が素晴らしいです。私までわくわくしてきます。ぜひ面白い研究を続けてください。今後のご活躍を楽しみにしています。貴重なお時間をありがとうございました。

調査結果

学生団体 (lanka) によるパラスポーツの認知度調査報告

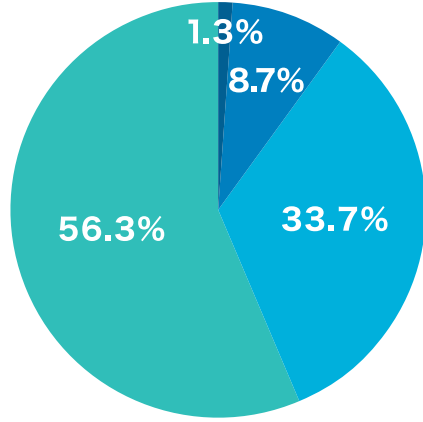
ダイバーシティを推進する山口大学の学生団体 lanka(ランカ)が、パラスポーツの認知度についての調査を山口大学の学生を対象に実施(2025年6月16日～7月16日)し、学生208名(男性58.2%、女性41.8%)からの回答を得ました。

パラスポーツについて、全体の3.8%が「よく知っている」、57.7%が「少し知っている」と約6割の認知度であった一方、テレビや会場で観戦する人は約1割、体験したことがある人は4人に1人と、実際にパラスポーツを見たり触れたりしたことがある人は少数であるという結果でした。



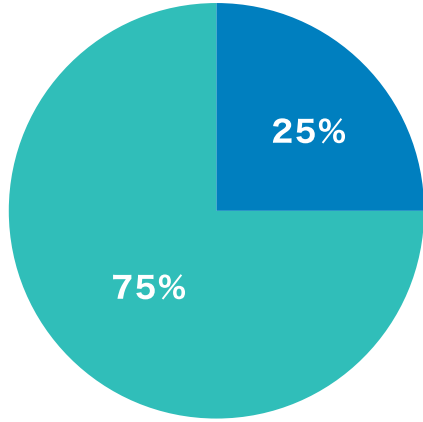
1. パラスポーツを知っていますか

- よく知っている
- 少し知っている
- あまり知らない
- 全く知らない



2. パラスポーツをテレビや会場でどれくらいの頻度で観戦しますか？

- よく観戦している
- ときどき観戦している
- あまり観戦していない
- 全く観戦していない



3. パラスポーツを体験した経験はありますか？

- ある
- ない

また、調査では約4割の方からパラスポーツに対する関心がある、体験イベントがあれば参加したいとの回答が得られました。

次号では、lankaの主催により2025年10月18日(土)に開催された、パラスポーツの魅力を体験し理解を深めるイベント「広がるダイバーシティ～パラスポーツ編～」の様子をお届けします。

